



TITLE:

刊行にあたって

AUTHOR(S):

山本, 博之

---

CITATION:

山本, 博之. 刊行にあたって. CIRAS discussion paper No.77 : 母の願い -- 混成アジア映画研究2017 2018, 77: 4-6

ISSUE DATE:

2018-03

URL:

[https://doi.org/10.14989/CIRASDP\\_77\\_4](https://doi.org/10.14989/CIRASDP_77_4)

RIGHT:

© Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

## 刊行にあたって

混成アジア映画研究会は、混成性(混血性と越境性)に注目して、東南アジア映画を愉しむことを通じて東南アジア社会について知り、東南アジア社会への理解を深めることで東南アジア映画をさらに愉しむことを目指す研究会です。メンバーは映画や映像の専門家ではなく、東南アジアの各国を対象に、現地に長期滞在して現地語と現地事情に通じている地域研究者です。

先ほど「東南アジア映画」と書きましたが、いったい東南アジア映画というジャンルはあるのでしょうか。仮にあるとしたら、それはどのような特徴を持ったジャンルなのでしょうか。東南アジアの11カ国に何らかの形で関わっている映画という外形的な括りだけでなく、東南アジア映画に何か共通の手法やテーマは見られないのでしょうか。

私は東南アジア社会の1つの特徴は「覚悟」にあると思うため、東南アジア映画を覚悟という観点から捉えられないかと考えています。本研究会が昨年刊行した『不在の父——混成アジア映画研究2016』で書いたことと一部で重なりますが、ここでいう覚悟とは「死ぬ覚悟はできている」という覚悟ではなく、生きるため(生かすため)にどのような目でも遭う覚悟のことです。そして、よそ者の目には別の選択肢があるように見えても、その社会に暮らす人にはそれ以外の選択肢が考えられないほど社会の「常識」となっている覚悟のことです。別の言い方をすれば、他のことはすべて犠牲にしてもこれだけは守るというものがあって、それが社会で共有されているとき、私たちはそこに社会としての覚悟を見るのです。このような意味で、東南アジア社会は覚悟という特徴を持つ社会だと言えます。

もちろん、一口に東南アジアといっても国ごとや地域ごとに様子が大きく異なり、同じように覚悟と言ってもその現れ方は社会によって異なります。それでも、例えば父と子、母と子、兄弟・姉妹どうし(義兄弟・義姉妹どうしを含む)のように親密な人どうしの関係に覚悟がよく現れるように思われます。そこで、今年度の『混成アジア映画研究』のテーマは「母の願い」としました。

本書は混成アジア映画研究会の2017年度の研究内容をまとめたものです。本研究会では研究会HPで作品レビュー等の記事を公開しており、本書に掲載された記事は研究会HPの記事を再構成したものを含んでいます。

第1部は研究会メンバーによる混成アジア映画に関する論考です。今号のテーマは「母の願い」ですが、このテーマについて深く掘り下げるというより、このテーマに緩やかに関わりながら、素材やアプローチを多様にするような論考を集めています。

第2部は、2017年6月に国際交流基金アジアセンターで開催された公開シンポジウ

ム及び上映会「女夜叉と空駆ける馬——『12人姉妹』が映す東南アジアの風土・王・民」の発表を再構成した論考を掲載しています。執筆陣は、シンポジウムのパネリストである3人に加え、視聴覚アーキビストとしてカンボジアの映画保存に大きく貢献してきた鈴木伸和さんの論考も掲載しています。

『12人姉妹』は、東南アジアのラオス、カンボジア、タイなどに国境を越えて広く伝わり、人々の暮らしに浸透している民話です。子どもから大人まで誰もが知っている民話の1つで、国によって内容は少しずつ異なりますが、教科書に収録されたりテレビドラマや映画やアニメーションのようなポピュラーカルチャーの題材になったりして、形を変えながら語り継がれて今日に至ります。『12人姉妹』も、母親と妻との間で引き裂かれ、母親への孝行を優先させる青年の物語であるとも見ることができます。

第3部は、2017年3月に大阪アジア映画祭と共催で行われた公開シンポジウム「ハードボイルド刑事とレディー・クンフー——マレーシア映画の新地平」を採録したものです。『ミセスK』のホー・ユーハン監督と『インターチェンジ』のデイン・サイド監督の掛け合いをお楽しみください。

第4部は、2017年3月から日本全国で劇場公開された『タレントタイム』(ヤスミン・アフマド監督、邦題は『タレントタイム～優しい歌』)のトークショーのノートを再構成したものです。日本で一般劇場公開された最初のマレーシア映画となった『タレントタイム』の魅力の一端を紹介することで、他のヤスミン作品や他の監督によるマレーシア映画が日本でも劇場公開されていくことを期待しています。

混成アジア映画研究会は、マレーシア映画文化研究会が対象を東南アジア全域に拡大したものです。英語名称はCine Adobo(シネアドボ)です。アドボというのはフィリピンの国民食ともいえる代表的な家庭料理で、肉やいろいろな食材を鍋に入れた煮込み料理のことです。レシピは家庭ごとに違い、ホームパーティーがあるとそれぞれのアドボを持ち寄って披露しあいます。いろいろなレシピの鍋料理を持ち寄って披露するアドボ・パーティーに発想を得て、映画に関する情報を持ち寄って披露しあう映画鍋が「シネアドボ」です。また、「シネアドボ」は、映画を愉しむことを通じて社会の問題を考えるシネマ・アドボカシーの略でもあります。

混成アジア映画研究会は、京都大学地域研究統合情報センター(現在の京都大学東南アジア地域研究研究所)の共同研究プロジェクトとして実施されてきました。地域研究統合情報センターでは、それぞれの地域社会の文脈を読み解き、それを通じて現代社会の課題に取り組み、その結果を学界だけでなく社会にも還元するような研究のあり方を模索してきました。そのような研究の1つに「災害対応の地域研究」プロジェクトがあります。2004年12月のスマトラ島沖地震・津波(インド洋津波)で17万3,000人という大

きな被害を出したインドネシアのアチェ州の被災と復興の過程を観察し、それを世界の人々や後の世の人々に伝えて教訓とするためにどのような方法があるかと考え、いろいろな専門性を持った人々が出会う機会を作ってきました。その様子を映像資料に残すために2011年に私たちに同行してアチェを訪れた深田晃司監督は、現場で感じたことを自分なりに表現するため、このたび全編アチェで撮影した映画『海を駆ける』を制作しました。主演はインドネシアと縁が深いディーン・フジオカで、2018年5月から日本全国で公開されます。

アチェはインドネシアの北西の端にあり、首都ジャカルタから遠く離れています。ジャカルタに暮らす人たちから見れば、同じインドネシアでも「外国」のように感じると言っても決して言い過ぎではないはずです。そこに、日本とジャカルタから大勢の映画人が訪れ、何日も寝泊まりして『海を駆ける』が撮影されました。

そもそも映画というのは良くも悪くも観客を「騙す」メディアで、現実にはないものをスクリーンに映し出すものです。設定上はアチェの物語だけれど実際の撮影はインドネシアのほかの地域で行うこともできたはずですが、そのような「映画の嘘」をあえて拒絶して、実際にアチェを訪れて撮影したという深田監督の思いはどこにあるのか、ぜひ劇場で確かめてみたいと思います。

また、ヤスミン監督は、夫婦間や雇用主と被雇用者の間の関係をマレーシアの「常識」から逆転させて描き、保守層からは現実的でないと批判されながらも、いまは現実ではないかもしれないけれどそうなるもおかしうはない「もう1つのマレーシア」を描き続けました。このことと重ねてみるならば、『海を駆ける』には、インドネシア社会やアチェ社会のいまの「常識」に過度に囚われることなく、「もう1つのインドネシア」あるいは「もう1つのアチェ」を考えさせるような映画になることを期待しています。

混成アジア映画研究会の公開シンポジウム・セミナーの開催にあたっては、国際交流基金アジアセンター、大阪アジア映画祭、国立国際美術館のご支援を賜りました。研究会の活動にご理解とご協力を下さっている機関や方々に感謝申し上げます。

京都大学東南アジア地域研究研究所  
山本 博之